

## 植物園の2月半

岩 槻 邦 男 (植物園)

植物園が現在の場所で薬園として出発してから来年で300年になります。ヨーロッパには、それより歴史の古い植物園がいくつかありますが、東大植物園はそれらに肩を並べるだけの歴史をもっているという計算です。植物園では、樹木が生長し、安定した植生を保ち、それではじめて多様な植物の種の生育の場が確保されるのですから、歴史の重みに現在の意味があります。日本の近代植物学の一世紀の歩みの中に占める東大植物園の位置も、他に較べるものもない程です。その歴史を通じて、国際的に貴重な資料標本や文献資料の蓄積をみたことも、植物園の特長で、これはたとえ巨額の資金と多数の人手を投入しても、短期間には整えることのできない財産です。最近、資源としての植物を見直さなければ、という声を聞きます。地球上に30万種も生育している植物のうちから、どれが役に立つものかを見出すためには、それらの植物の間にどのような差異や類似があり、

それは進化の歴史のうちにどのように確立されてき、どのような機能上の意味をもつかについて比較研究をすることが基礎的な研究として最も必要なのですが、その研究のためには植物園にある植生と資料類は極めて有力な戦力という訳です。もっとも、それは必要条件の一つが充たされているということで、条件が完備されているのではないといわねばならないことは残念なことです。

1978年から始められている野生植物種子胞子の長期保存に関する研究は、着眼点でも方法でも、国際的に話題を呼ぶことは必至のものです。長期保存の影響を明らかにするためには長期間の継続観察を必要とするのは当然で、やっと基礎データが出せるようになりますが、この研究も現在のような小さな規模でやっていたのでは、すぐにアイデアを盗まれて、規模の大きいどこかの機関が成果を我がもの顔にしてしまうのかもしれない。

こちらの専任にならせていただいた早々から、こ

の建物では現在風の研究の設計は難かしいから、と建物改修のお願いをしたり、せめて下草刈り以上に植物の育成に手が廻るよにもう少し、と予算の増額の方策を検討したり、グランド代りに入園してくる子供達にどのように植物園を利用してもらうべきかを考えたり、と、植物学に直接は関係のないことばかりやっておりますと、折角の施設や資料を生かすことは一寸もならないのではないかと反省しきりなのが2ヶ月経った今の率直な感じです。

研究の上では、これまで主として東南アジアをフィールドにして植物相の調査研究に携わってきましたし、シダ植物を対象として、系統分類学的研究を行ってきました。植物が30万種にも多様化しているのは長い進化の過程を経てきたからであり、生命のもつ歴史的側面を解析する手掛りとしては生物の多様性は最も具体的な事実です。分類学という言葉のもつ静的なイメージでなく、植物の種や系統の分化を追究し、植物相の成立の過程をあとづけることで生命というこの最も神秘的な存在の最も興味のある一面に迫ることは科学的好奇心を強くかき立ててくれることです。そして、多様な植物を対象とする研究が行なわれるべき場として、植物園を生かすことは研究上も必至のことといえます。

都心に16万㎡の場所が緑に包んであれば、東京大学の用に供するだけというのはもったいない話です。研究教育上の必要から確保される多様な植物は、その多様さを通じて生命のもつ歴史的な側面を見せてくれます。それを見る眼を開かせるためには一寸したきっかけがあれば充分です。折角準備された多様な植物を使って、そのような社会教育を施すことは植物園が果すことのできる附加的な効能といえるでしょう。しかし、ここしばらくの間入園してくる人達の挙動を見ていると、甚だしく厭世的な気分に近いやられることがあります。植

物園は庭園よりももっと広場的要素が大きいものと、一般には受け取られているのでしょうか。見廻りの要員も充分でない現状では、大切な材料が傷められても、極端な場合いつの間にか見当らなくなっている、黙って目をつむっているより術がないのでしょうか。

300年の歴史は植物園にとって得難い宝です。しかし、広場として使ったのでは宝のもち腐れということでしょう。研究教育のために準備された多様な植物は、慌ただしい都心の一角に緑の空間を作ります。その空気を味わう場として活用されれば、植物学の研究業績が上げられるのと同的に、植物園に佇んで思索することが、データの製造に追いつかされている日常の科学を止揚して、真に独創的なアイデアを育てる泉ともなってくれることでしょう。明日の植物園が、植物学の材料の苗床であると同時に、ノーベル賞級研究のためのアイデアの温床ともなるように有効に利用できるようにしたいものです。

学生時代から30年間一貫して籍を置いていた京都大学から転任して参りますと、いろいろと当惑したり面喰ったりすることがあって慌てます。しかし、一番よく似ていることが、研究そのものではないことに費す時間が長いことであるというのは何とも残念な現実です。いろいろの用事の合間に研究をするというのは研究者の在り方としては異常なことです。これは個々人の自覚では解消できないことだけに、何だか恐怖にとらわれます。

京大で理学部弘報のお手伝いをしていた頃に、何かと参照することの多かった「広報」に寄稿することになって、最初を書くことにしては現実の酷しさに触れることが多過ぎて残念なのですが、この次の機会には、大きな成果をうたい上げ、次への飛躍に向けて夢と希望に充ちた文が寄稿できるようでありたいものと念じます。